

CMOメンバー紹介!



筒井 俊一
第1ヴァイオリン

朝、ライプツィヒの聖トーマス教会でミサを唱う、今、国民文化祭で第九を演奏参加しようとしてみる。

タクトを振る父の幻影、カンツォーネ、ウインナワルツ、春の声、運命、マンドリンの甘いトレモロから脱し、弓で奏するヴァイオリンの世界、ヘッセやゲーテ、シラーの世界からモーツァルト、ヴェーバー、ブラームスに足を踏み入れる、世界大戦の名残東西分割ドイツに足げく通い、スパイと疑われる己れ、ワイマールの雪深き

我が音楽遍歴



榎木 啓子
第1ヴァイオリン

「無駄年金残念、残金妬む」(ムダネンキンザンネン、ザンキンネタム)濁点と読点は無視で上下から読んでください。

趣味は「言葉遊び」。標語、ネイミング、川柳、回文などに頭をひねるのが楽しみで特に回文ができあがった時の快感といったらたまりません。何度か賞もいただいています。小泉政権時、年金損失をテーマにした十七文字の回文の受賞では「時流ネタでうまい」と評されました。披露しちやいます。

趣味は「言葉遊び」



川島 梓
コントラバス

最近行っている、猫好き仲間と猫カフェ巡りに行こうと思えます。猫アレルギーにも負けません。

CMOに参加させていただいて早2年。趣味といえばもっぱらこのオーケストラで楽器を弾くことです。高校時代に部活動で予期せずコントラバスを担当することになり、それ以来低音の魅力にはまっています。つたない演奏で皆様にご迷惑をおかけしながらも、また楽器を弾けることをとても楽しんでます。

低音の魅力にはまり



篠崎 琢弥
チェロ

「藤娘」など、おぞましくて誰も見ないでしよう。

「藤娘」を演った私!

幼い頃、母のお琴をいたずらしてましたが、その後藤井波津音門下に入り奥許を頂きました。しかし久しく弾いていません。西川流の師匠宅に用があつて伺った折、お染久松の久松役がいらないからと無理に立たされ、それから深みにはまって「落人」の勘平役からお正月に「松の緑」、「藤娘」

「藤娘」を演った私!

新連載! 第1回

我が棒振り修業時代! 指揮者 齋藤純一郎



チェリビダッケと筆者

「君は、白紙になれるかい?」
チェリビダッケは、私にそう問いかけた。1973年のことだった。その時、私は、当時はまだ国名をチェコスロヴァキアといった頃のブラティスラヴァ(現・スロヴァキア共和国の首都)という町に「チェリビダッケを聴くため、会うためだけに」訪れていた。

衝撃的だったチェリビダッケの演奏
東京芸大指揮科を卒業し、とりあえず大学院に入ったものの当時の日本の音楽の現状に飽き足らず、どうしてもクラシック音楽の「メッカ」であるといわれるウィーンに留学したかった。そしてウィーン国立音楽大学でメータやアバドを育てた名伯楽の誉れ高いハントス・スワロフスキーに師事するつもりだった。

「人生を棒に振ってもよいから、棒振りになろう」と決断するよりはるかに以前の高校生時代、私はフルトヴェングラーが指揮したバイロイト祝祭管弦楽団による実況録音の《第九》のレコードを聴いて、「熱いモノ」を感じて何故か「涙した」ことがある。それ以来、フルトヴェングラーは私の中では何か別格の指揮者として、存

「君は、白紙になれるかい?」

在していた。指揮科の学生になり立てであったある日、「ベルリン・フィルの栄光」というドキュメント映画を上映しているとの情報があつた。この映画でフルトヴェングラーが実際に指揮している姿が見られるに違いないと、もう一人の指揮科の友人を誘って観に行つた。ベルリン・フィルは、今ももちろんオーケストラとしては、世界最高レベルの技術と熱意を持つて演奏に取り組んでいるが、当時の映像は現在のそれをはるかに凌ぐ、音楽に対する楽員の熱意が感じられた。その映画で《マイスタール・シンガー》《テイル・オイエルン》《シューベルト》等、多くの貴重な「動く」フルトヴェングラーの姿を拝むことができた。また、彼の指揮は「意外に解かり易い棒」だったことも勉強となった。しかし、今でもフルトヴェングラーの生演奏に接しられなかったことは、人生の痛恨事である。

そのドキュメント映画で、終戦のあと戦災の瓦礫の中、テイタニア・パラストという会場でこのコンサートで、《エグモント序曲》を振っている指揮者とその演奏に、衝撃を受けた。この凄まじさは一体何なんだ! この指揮者は一体誰だろう! そう、その彼こそが、1912年生まれ、当時33歳だったセルジュ・チェリビダッケであった。その時は、将来私の運命を決定的に左右する出会いが待っていたようことなどは、まったく予感すらしなかった。

コンサート三昧のウィーン時代
私は、ウィーンに住み始めてほとんど毎日、音楽会に通っていた。おそらくウィーン在住時のコンサート回数は有に750回は超える。その全てを記録してあり、今でも私の大切な財産となっている。主なものとしては、ウィーン国立歌劇場ではベ

いざ! ブラティスラヴァへ!

そんな冬のある日、街中の円柱の広告に「ザルツブルク復活祭のモーツァルト演奏会。オーケストラウィーン・フィル、指揮セルジュ・チェリビダッケ」というのが、眼に止まった。「あのチェリビダッケも、ようやくウィーン・フィルを指揮するようになった。もうすぐウィーンでも聴けるようになるかもしれない」となぜか呑気に思い込んでしまった。しかし、この演奏会のためのリハーサルでチェリビダッケはオーケストラと大喧嘩をして、それ以後ウィーン・フィルを振ることは、二度となかった。これからはいつでも聴けると思い込み、ウィーンからザルツブルクまで、汽車で4時間、車で3時間半だということになった。当時、貧乏学生だったので行けなかったのだ。せつかつく素晴らしい情報、大チャンスのだったというのに……。私の人生最大の痛恨事の一つである。

その数カ月後、私は、またもやウィーン街中の広告で、チェリビダッケが、スロヴァキア・フィルを指揮するコンサートがあることを知ったのだ。

そう、私にとつて2度目のチャンスが訪れた。「とにかく行って、リハーサルを見せてもらおう」。当時は共産圏の国の滞在ヴィザを取るのが困難で、日本では何か月もかかったが、ウィーンでは隣国のチェコのヴィザを簡単にとることができた。あの映画のチェリビダッケに会える。どんな棒を振るのだろう。楽しみだ。

いざ! ブラティスラヴァへ!
(以下次号)

齋藤純一郎 (当団常任指揮者)

ム指揮の《フィデリオ》《魔弾の射手》《コシ・ファン・トゥッテ》《サロメ》《エレクトラ》《ナクソス島のアリアドネ》、ホルスト・シユタインの指揮の《ニーベルングの指環》、ソリストではエディター・グルペローヴァのウィーン・デビュイの《魔笛》夜の女王、ビルギット・ニルソン、ペータ・シユライアー、ルネ・コロ、カール・リッターブッシュ、フィッシャー・ディエスカウなどの名歌手たち、オーケストラではウィーン・フィル・ベーム、アバド、メータ、ウィーン交響楽団・ジュリーニ、トランキエンストラー管弦楽団、そのほかミケランジェリ、アルゲリッチ、ポリーニ、ルービンシュタイン、ケンプ、クレメール、グリユミオー、ロストロポーヴィチなどなど超有名な演奏家ばかりで、枚挙にいとまがない。何しろ、当時10シリング(当時日本円で130円程度)で、立ち見席に入れるのだから、本当に恵まれていたといえる。

ウィーンで音楽を学んでいた私にとつて、日曜日は、特に忙しい。朝の11時から、ウィーン・フィルの定期演奏会をムジックフェライン(ウィーン楽友協会)の大ホールで聴く。そして午後4時から、ウィーン・トーンキユンストラ管弦楽団の定期演奏会を聴く。例えば、こんな日もあった。ハインツ・ワルベルクが、ブルックナーの交響曲第8番をムジックフェラインで16時からトーンキユンストラ管弦楽団を指揮する。終演後、呆れたことに、ワルベルクは、スタスタと手ぶらでムジックフェラインから徒歩5分にあるウィーン国立歌劇場に行き、19時半から《カルメン》を指揮したのだ。もちろん私もついて行って観た。そういう意味では、幸せな実りの多い時期であった。